

校名：東京学芸大学附属小金井中学校

所在地：〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 電話番号：042-329-7833

記載日：平成28年5月26日 記載者：石井 健介 記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

東京第二師範学校男子部附属中学校を母体とする。東京学芸大学のキャンパス内に設置されていることから、大学学部の教科教育の一環としての授業参観、教育実習の事前事後指導、大学院及び教職大学院の研修や研究への資料提供など、学部や院と連携した学生の指導を積極的に行っている。また、毎年開催する教育研究協議会においては、時代の要請や生徒の実態に即した実践的な研究テーマによる授業公開ならびに研究協議を行い、全国各地から多くの参会者を迎えている。国内外からの学校訪問や研修視察も多い。

本校の生徒は「自主的に行動しよう」を合言葉に、自由闊達な雰囲気の中で学校生活を送っている。それぞれ半年近くの事前学習を課して各学年で実施される修学旅行、男女混合縦割りチームで勝敗を競うスポーツフェスティバル（運動会）などは本校の学校行事の大きな特色である。また、制服を制定せずに「学びの場」にふさわしい服装を自分たちで考えさせること、「校歌」の代わりに生徒と教員が共同で作詞作曲したものを「私たちの歌」として大切に歌い継いでいることなども、本校の校風を表すものといえる。

貴校の卒業生の活躍状況について：

高校から先の進学先、就職先等については、個人的に情報を知らせてくれる卒業生以外は把握していない。学校として追跡調査をする予定も今のところない。

なお、1万人を超える卒業生で構成される同窓会（一般社団法人）が連絡先や近況等をかなり把握している。個人情報保護の観点から、「名簿」等の発行は差し控えているが、各期の常任幹事を中心に情報の管理と更新を続け、慶弔に関わる連絡や、同期会等の広報活動に利用している。ただ、卒業年度によって情報の質と量に差があり、この点は課題として残っている。

同窓会と教育後援会で年1回発行している広報誌の中では、国内外で活躍している卒業生を紹介するページを設けている。最近3年間では、太田道彦氏（丸紅株式会社副会長）、進藤奈邦子氏（WHO感染症対策調整官）、朝比奈あすか氏（作家）などがご自身の寄稿とともに紹介された。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

該当する方が少ないので、ここに記すことはあまりないが、活躍状況については旧教職員によって構成される「緑萌会」という組織が把握、更新している。公立学校へ管理職等として出られた方、他大学へ教員として出られた方に大別される。特に後者の方々は、研究協議会や授業研究会等で機会があるごとに来校され、互いの研究を深めるための情報交換、意見交換を行っている。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

【取り組み例1】学ぶ力を育む各学年の修学旅行

本校では各学年に「修学旅行」を設定し、3学年を通して「研究力～見方・考え方・味わい方～を体験を通して学ぶ」ことを目指している。各学年の概要を一般受検者向け「学校案内」から抜粋する。

○1年「北総常南修学旅行」



北総・常南（千葉・茨城）方面へ。貝塚・魚市場・工場・寺院など、社会科を中心にした見学がめじろおし。またクラスごとに分かれて農家を訪問し、お話をうかがったり、実際に畑の仕事を体験させていただいたりする貴重な機会です。（左の写真は、ピーマン農家を訪問し、ハウスの中でインタビューをしたり、採りたてのピーマンを試食したりしている生徒たち。）

○2年「秩父長瀬修学旅行」



地質学の宝庫といわれる秩父地方へ。様々な地質や岩石をよく観察したり、実際に化石を採集したりして、秩父・長瀬地方の研究をします。「大地は動く」ということを実感できる瞬間です。（左の写真は赤平川沿いの犬木の不整合を観察する様子。不整合面を境にして、約1億年のギャップがあることを知ってびっくりする。）

○3年『人と文化』修学旅行



奈良・京都地方へ。2年のときから自分が選んだテーマにしたがい、グループごとに事前研究を深めていきます。見学コースも、研究テーマにそって自分たちで作っていきます。主に、社会・美術・国語を総合した、文化についての主体的学習の場となっています。（左の写真は「飛鳥めぐり」のグループ学習で飛鳥寺を訪れた生徒たち。この後、全員で甘樫丘に登り、合唱する。）

3つの修学旅行は「調査能力ー探求能力ー鑑賞能力」という能力の系統性をもとに構成されている。具体的には、1年で「文献やインタビューで情報を得る力」、2年で「知識に基づき論理的に推論する力」、3年で「事物の背後にある思想や文化を味わう力」というように発展していく。

【取り組み例2】自ら課題を見出し探究する「課題研究の時間」

2年の「総合的な学習の時間」に行う生徒選択制の課題探求学習。10名前後の教員が開設する「講座」のいずれかを選択し、必修教科の枠を超えた発展的な学習を行う。校内の活動にとどまらず、他校との交流（震災関係）やコンクールへの出品や出演（発表広告・英語狂言）なども行う。

平成27年度の講座名及びテーマ等を抄録する。

○自己表現の手段としての書道（文字という約束の上に、約束を超えた美が生まれる）

○戦略としての日本語とデザインの研究（発言広告作成とコンクール出品）

- 震災と放射線（震災と放射線の影響について調べる）
- Mathematical Approach to Real World（現実事象への数学的接近）
- 鹿児島学（鹿児島の自然と文化を研究する）
- あかりづくり（照明器具の創作による光の表現）
- リメイク（身の回りのもののリメイクによる再利用の研究）
- 英語狂言（狂言「蝸牛」を英語で演じよう）
- 言語技術（言語技術の向上を目指した活動）

震災関連の課題研究がきっかけの一つとなって、平成28年4月に、田老第一中学校の代表を招いて「田老を語る会」を開催することができた。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

現在、地域との交流が活発に行われているという積極的な評価は下しにくいですが、具体的には次のような形で地域と情報交換や連携事業を行っている。

- 小金井市生活指導主任研修会（生活指導主任が参加）
- 小金井市要保護児童対策地域協議会（同上）
- 東京駅伝小金井市男子監督（陸上部顧問が担当）
- 東京都中学校体育連盟サッカー部役員（サッカー部顧問が担当）
- FC 東京 U-15 むさし練習場・中体連等サッカー大会会場提供（共同開催）
- 中体連水泳ブロック大会及び多摩地区大会会場提供（同上）
- 小金井市青少年健全育成西部地区委員会へ活動場所提供

そのほか、地域との連携を視野に入れて、小金井警察署生活安全課長・JR東日本武蔵小金井駅長を学校評議員に迎え、地域の実情にそくした学校運営をこころがけている。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

まず、附属学校全体の存在意義については、次のように理解し、それにそった研究及び実践を積み重ねている。

本学においては附属学校の教員と大学の教員が行っている重点研究や附属学校合同研究会で取り組む研究において共同で教育研究を進める環境にあり、時代の要請や児童生徒の実態にそくした授業研究・教材研究などが全教科等で行われ、それが大学・附属双方の教育の質を高めることにつながっている。大学教員・附属教員間の連携事業・プロジェクト研究なども活発で、定例の報告会等を通して成果を共有している。このように、大学と太いパイプを持ち、活発な交流がある事が、実験校である附属が先進的な実験を行う上で敷居を低くし、適切な現場環境の提供につながっている。そしてそれらの成果が、附属学校紀要、大学紀要や学術雑誌に掲載するようなまとまった研究に結実している。

次に、本校独自の存在意義については次のように考えている。

本校が大学のキャンパス内に位置するという特色を活かし、学部・院と緊密に連携した教育実習・教育研究機関としての役割を担うこと、それが将来的に我が国に有為の教員を送り出すことにつながっていくと考える。

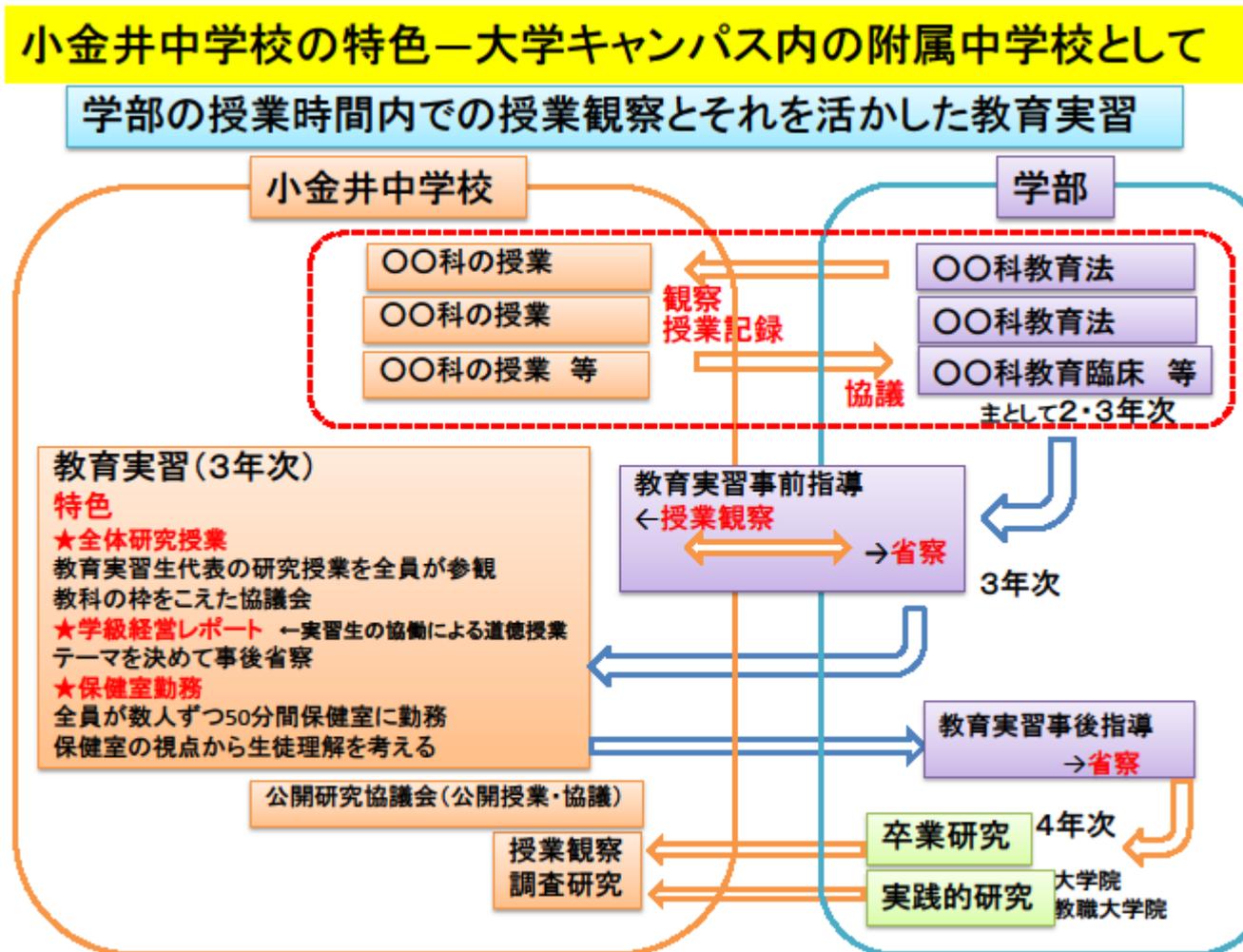
以下に平成27年度の例を掲げる。

本校は、学部の教科教育法の授業の一環としての授業参観や参観後の研究協議に学部教員との協力のもとで取り組み、あわせて教育実習の事前・事後指導における授業観察や省察の場を多数の教科で提供している。平成27年度における教育実習の事前事後指導は8教科延べ15回、学部授業協力は6教科延べ13回、実施された。大学院の授業協力は3教科3回に加え、教職大学院研修生1名を年間を通して受け入れた。

また、毎年130名前後（観察実習含む）受け入れる教育実習生指導においては、特に中学校教員を目指す3年生の指導を計画的に行っている。学部3年次の教育実習においては、実習生代表による研究授業を、教員を含めた全員で参観し、授業後に教科の枠をこえた分析・協議が行われる。また、配当学級を同じくする実習生全員の協働による道徳授業を必ず実施し、学級経営や生徒観察をテーマとする学級経営レポートを課すと同時に、50分の保健室勤務を全員が行うことを通して、保健指導の視点から生徒理解を深めさせている。

その結果、単なる「授業体験」にとどまらない、「授業観」「生徒観」の変化をともなう実習体験となり、教職に対する意識の変革が多くの学生に見られる。

以上のような附属学校としての役割を図式化したのが次の図である。



なお、次の論文に本校の教育実習プログラム及び学生の意識の変化についての調査結果をまとめた。

太田伸也・石井健介（2016）「小金井中学校における教育実習の特色と学生の『研究課題への意識』—学部との連携を視野に入れた教育実習プログラムの検証に向けて—」東京学芸大学附属小金井中学校『研究紀要』第52号，pp89-100